
お葬式爆笑Ver.

N澤巧T郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

お葬式爆笑Ver.

【コード】

N2510A

【作者名】

N澤巧T郎

【あらすじ】

今日もまた誰かが死んでお葬式が行われた。それはそれはおもしろいお葬式が。

「それでは……遺書を、読ませていただきます」

「はい……」

グスン

ズズズツ

すすり泣く声が聞こえる。

「ええ……身に着けるもの、演劇、舞踊などで出演者が使う衣服……」

……

「……そりゃ衣装や……」

「ウツウツ」

「グスツ」

「ズズズツ」

「……もうひとつ、遺書のほうを、預らせていただいております

……。それでは、読ませていただきます」

「はい……」

「……辞典の事……」

「そりゃ辞書や……」

「ううツ！ ウツ！！」

「ズズズツ！！」

「まったく……この人は……最後まで……うっ！！」

すすり泣く声がいっそう大きくなる。

「……それでは、最後の遺書を……読ませていただきます」

「はい……」

「……以上。……以上、遺書でした」

「……最後はシャレかい……」

「ウツ！！」

「ズズズツ」

「くっ！！ ううっ！！」

「ヒッククッ!!」

泣き声で会場が包まれる。

「……ええ、最後に故人の肉声のテープを、預らせてもらっています」

「はい……」

「それでは、流します」

ガチャ

ジー

「……あーあーあー。あめんばあまいな食べたんかい!?!?!」

「いきなり大声出さないで。びっくりしちゃうから」

「ええ、皆さんこんにちは。この度は私のディナーショーに来てくださって」

「葬式だ葬式。」

「それでは聞いてもらいましょう。青い山脈」

「古い古い」

「エイドリア〜ン!!」

「ロッキー山脈じゃないから。あんたが歌うのは青い山脈でしょ？」

「ロッキー色に染めないで」

「アイルビーバツク」

「シユワちゃん色にも染めないで!てかあんた死んでるから戻ってこれないよ!!」

「僕は死にましえ〜ん!!」

「すでに死んじやつてるから」

「このバカチンが!!」

「その言葉そっくりそのままお返しします!!」

「なんの魔封波返し!!」

「マジユニアかおまえは!!つてかおまえがしないとイケないのはバカチン返しだから!!魔封波返せてもバカチン返せないよ」

「オラに元気を!!」

「分けてあげたいのはやまやまなんだけどさ、あんた死んじやつて

るから出来ないわ」

「クリリンのことか〜!!!」

「お前のことだよ!!!勘違いでスーパーサイヤ人になられても困るから」

「冗談はさておき、漫談でも一つ」

「それも置いてくれ、冗談も漫談も置いてくれ」

「続きまして、おもしろ御焼香」

「それさっきやったから。若手芸人全員やらされたから。追い込まれて焼香ばら撒いたヤツいるから」

「ふざけてんじゃねえよ!!!」

「おまえの遺言だろうが!!!司会の人が言ってたぞ!?故人の強い要望でつて!!!」

「続きまして、ロツクお経」

「乗れねえよ!!!お経で縦揺れは出来ねえよ!!!16ビートとか無理だから」

「それでは、少年合唱団によるお経の合唱です」

「子供の純真な声でお経はやみて。聞いてみたいって心はあるよ。

あるけどもさ。やっぱ歌っちゃダメ。うん」

「お葬式を終わります。みなさん。家に帰るまでがお葬式ですから」

「この会場だけだよ。それにまだお葬式終わらないからね。勝手に終わらせないで」

「それではお葬式V o l . 2をはじめたいと思います」

「そんなんはじめないで。一回で充分だから。間も空いてないし。

せめてハーフトイムを設けてくれ。」

「いや〜。お前ツッコミうまくなったな〜」

「いま聞いてないでしょ?勝手にテープに録音してんでしょ?それにあわせてんだよこっちは。よく考えてみたらすごいことなんだから。奇跡だよ奇跡。キリストもびっくりだ」

「長いもんな〜。もう405年くらい経つか」

「関が原の戦いからの仲か。大往生にもほどがあるぞ」

「でもホントにそんなぐらいやつてたかつたな……。2年ぐらい」

「どこがそんなぐらいだよ！！200分の1じゃねえか！！1000
だったら500だよ！！当たり前だよ！！！！」

「ちよつと……目に粗大ゴミが……」

「大きすぎるなあそれは。入ったらえあらいもんだよあんた」

「……ああチキショー。涙が止まれねえや！！誰かコルク栓もつて
来いコルク栓」

「それ涙腺に押し込んだじゃう？でも粗大ゴミが入るぐらいだからね。
出来るかもね」

「まあ、あれだ。最後に言っておくことがあるなら。そうだな。ど
んな辛くて、悲しいことがあってもさ、笑いに変えちゃえてこと
かな。オレって笑うの大好きだからさ。一番身近にある幸せって笑
うことだって思ってるわけ。だからさ、みんなに笑ってほしいわ
けよ。悲しいとか悔しいとか、つらいとか、そんな理由で涙を流し
てほしくないわけ。だからさ、俺が死んだくらいで泣かないでよ。
みんなの笑顔がみたいなあ。なんてね。じゃ、この辺で終わろうか
な。ああ、そうだ。1つ言い忘れてたけどいま言ったこと全部ウソ
だから。」

「それがウソだろ。もういいよ……」

『ありがとうございます』

パチパチパチパチパチパチパチパチ

パチパチパチパチパチパチパチパチ

パチパチパチパチパチパチパチパチ

「ヒックッ！！」

「ウ……うつつ……！！」

「それでは、これにて、すい臓がんでこの世を去った故人の、お葬
式を終わりにさせていただきます……ええ、それでは……最後に合
掌でお別れとしたいところですが、故人の要望により……強い要望
により……爆笑で、終わらせて頂きたいと思えます」

「うつつつつ」

「さっ……さよなら……」

「くっ……」

「……ありがとう……」

「ヒックツッ!!」

「それでは……爆笑!!!」

そして会場は爆笑で包まれた。

あるものは腹に手をやり。

あるものは笑い転げた。

そして誰もが、涙を流すほど爆笑していた。

これが、地球を笑わせる男といわれたお笑い芸人の最後だ。

(後書き)

先日おばあちゃんが亡くなりました。

そのとき、お葬式に参加しながらふと思いました。

自分ならどんなお葬式を挙げるだろうか。

私は爆笑に包まれながら逝きたい！！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2510a/>

お葬式爆笑Ver.

2008年11月7日07時24分発行